

サンプルファイル <https://nkbp.jp/npc>

上記URLから、記事に関連したサンプルファイルをダウンロードできます。

を選ぶ。

「実行用1」シートを開いて、作成したマクロを実行してみよう。任意のセル(ここではA1セル)を選択し、「表示」タブの「マクロ」をクリックして「マクロ」画面を表示し、マクロ「書式設定1」を選んで

「実行」をクリック(図5)。すると、記録時と同様に、B2~C2セルに「太字」と「中央揃え」が、B3~C3セルに「通貨」の表示形式が設定される。

変更していない設定も記録

「マクロ」画面でこのマクロ「書式設定1」を選んで「編集」をクリックし、Visual Basic Editor (VBE) でそのプログラムを確認してみよう(図6)。記録した操作手順に比べて、コード化された行数がやや多いことが分かるはずだ。

まず「Range ("B2 : C2")」でB2~C2セルを表すRangeオブジェクトを取得し、Selectメソッドでその範囲を選択(図7)。次の行では、Selectionプロパティで選択範囲を表すRangeオブジェクトを取得し、その「Font」プロパティで、フォントの設定を表す「Font」オブジェクトを取得する。その「Bold」プロパティの値にTrueを設定することで、このセルのフォントが太字になる。

「With」の後にオブジェクトを取得する式を指定すると、「End With」の行までの間、プロパティやメソッドは対象のオブジェクトを省略して、「.(半角ピリオド)」から記述できるようになる(図8)。作例ではSelectionを指定し、選択範囲を対象に、以降の処理を実行している。

なお、Subプロシージャの「Sub ○○」~「End Sub」の間のコードは全体に1段階インデント(字下げ)しているが、この「With ○○」~「End With」のように開始行と終了行がセットになった処理のまとめ(ブロック)は、その間の各行をさらに1段階インデントするのが慣例だ。

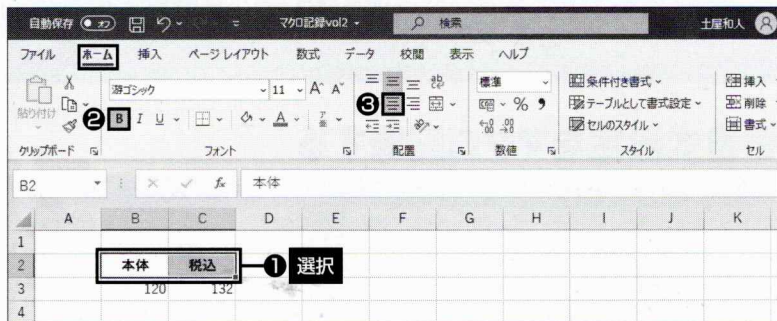


図3 B2~C2セルを選択し、「ホーム」タブの「太字」をクリック。さらに、「ホーム」タブの「中央揃え」をクリックする。これで、この2つのセルの文字列が太字になり、各セルの左右中央に表示される



図4 B3~C3セルを選択し、「ホーム」タブの「数値の書式」の「▼」から「通貨」を選ぶ。これで、この2つのセルの数値が、「¥」の付いた通貨形式で表示される。記録したい操作はこれだけなので、「表示」タブの「マクロ」からマクロの記録を終了する

●マクロ「書式設定1」を確認する



図5 作成されたマクロ「書式設定1」の実行結果を確認しよう。「実行用1」シートを表示し、任意のセル(ここではA1セル)を選択した状態で、「表示」タブの「マクロ」からマクロ「書式設定1」を実行する。このシートのB2~C3セルに、記録時と同じ書式が自動的に設定される